

90. 近代思想史における日本型宗教改革としての鎌倉新仏教の研究

東北大学大学院国際文化研究科 准教授

KLAUTAU ORION

概要

本研究は、近現代日本において「宗教改革」という概念が仏教界にどのように受容され、僧侶や在家など仏教者の思想にいかなる影響を及ぼしたのかを、歴史的観点から総合的に考察したものである。仏教者のみならず、福沢諭吉（1835-1901）や津田真道（1829-1903）といった「文明開化」の枠組みの中で宗教と距離を置いていた知識人たちも、19世紀末以降、特にマルティン・ルター（1483-1546）の「Reformation」に着目し、日本の事象を論じるうえで有効なモデルと見なしつつ、その限界にも注意を払っていた。日本仏教との関係においてルターの「Reformation」を参照する姿勢は、1910年代初頭の西洋史学者・原勝郎（1871-1924）の鎌倉（新）仏教論に端を発するとしばしば指摘されるが、実際には1880年代からすでに多くの仏教者の間で見られ、明治初期における仏教改革運動の原動力となっていたことが、本研究を通じて明らかになった。以上を踏まえ、本研究では、日本近代仏教の歴史的展開を語る上で「宗教改革」という概念がどのように機能し、思想史上いかなる意味を担ってきたのかを検証した。

背景および目的

日本仏教の歴史を「宗教改革」という観点から考察する姿勢は、多くの先行研究によれば、1911年に京都帝国大学教授で西洋史学を講じていた原勝郎が発表した論文「東西の宗教改革」に始まるとされている（大隅和雄『鎌倉仏教とその革新運動』『岩波講座日本歴史5』1975年、214-215頁；佐々木馨『中世国家の宗教構造』吉川弘文館、1988年、3頁；James C. Dobbins, “Envisioning Kamakura Buddhism,” in *Re-Visioning “Kamakura” Buddhism*, ed. Richard K. Payne, University of Hawai’i Press, 1998, p.25 など）。原は、法然・親鸞をはじめ、日蓮や道元など鎌倉期の宗祖たちの活動が、ルターやカルヴァンに代表される近世ヨーロッパのキリスト教徒による「Reformation」に相当するものであると論じたが、この論考が同時代に大きな反響を呼んだわけではなく、むしろ戦後期に再評価されたのである。さらに、戦後における再発見の過程では、原の議論がマックス・ヴェーバー（1864-1920）の近代化論との関連のもとで読み替えられ、別の思想的展開を辿ることとなった（小笠原真『近代化と宗教』世界思想社、1994年、62-83頁）。本研究は、このような研究界の現況から出発し、「日本仏教」というものの全体の歴史的構築と深く関わっている上記の言説の系譜を正確に理解するため、原がその論文を発表する以前の「日本仏教」と「宗教改革」を関連づける語り方の系譜を検討するとともに、原のインパクトを正確に評価するため、論文発表年である1911年以後の鎌倉（新）仏教論の展開も考察しようと考えた。以上、本研究は「鎌倉新仏教＝日本型宗教改革」という見方がどのように形成されたかを、原勝郎の議論、19世紀末の新仏教運動、そして近代化論との関連から再検討するものである。

成果

本研究は、国立国会図書館デジタルコレクションや成田山仏教図書館のデータベースを活用し、明治初期から昭和前期に至るまで、特に仏教者が語る「宗教改革」に関するテキストをできるだけ網羅的に収集し、時代的な

傾向や語り手の思想的展開に着目した。その結果、次のような点が明らかになった。幕末から維新时期にかけて、ヨーロッパの「Reformation」は一部の仏教者によってすでに「文明」の象徴として語られていたことは知られていたが（拙稿「幕末期における宗教言説の展開」前田勉・荻部直編『日本思想史の現在と未来』ぺりかん社、2021年）、1880年代になると、一部の仏教者が「日本のルター」などと自称し、仏教改革そのものの枠組みとして「Reformation」を捉えるようになる。この時期には特に、ハーバート・スペンサー（1820-1903）に代表される19世紀末ヨーロッパの社会進化論における「宗教」観や、フランソワ・ギゾー（1787-1874）が示したような文明論的な進歩史観の影響を受け、「開化」を目指すためにも西洋のような「宗教改革」が必要である、という議論が仏教者の間で展開された。

明治中期に「新仏教」を唱えた改革者である北畠道龍（1820-1907）、水谷仁海（1836-1896）、中西牛郎（1859-1930）の三名はいずれも、ルターを強く意識しながら自身の運動を展開していたことがわかった。1880年代末から1890年代にかけて、いわゆる「国粹主義」が台頭し、その時期以降、新たな法体系が整備されるなかで、ヨーロッパの「Reformation」は理念として徐々に距離を置かれるようになったものの、「改革」に関わる多様な言葉や概念は依然として生き残り、新仏教運動のなかで継承された。次の段階としては1900年代、特に日露戦争後、「Reformation」を初めて日本の過去の事象として捉える見方があらわれ、それが原勝郎の発想へとつながっていく。原は、1870年代のドイツ統一期前後に刊行された文献を参照し、「国民文化」の成立条件としてルターらの運動を捉え、それを日本の鎌倉期に当てはめようと試みた。なお、彼はマックス・ヴェーバー（1864-1920）の近代化論と関連づけて鎌倉期の仏教を論じたわけではなく、むしろ政治的共同体以前に文化的共同体としてドイツを捉えた19世紀の同国の史家の視点に感銘を受け、「武士文化」が成立した鎌倉期にも同様の動きを見出そうとしたのである。この姿勢は国史家の松本彦次郎（1880-1958）に受け継がれ、やがて家永三郎（1913-2002）らの中世仏教論へとつながり、戦後に展開した。

本研究では以上のように、比較的長いタイムスパンにわたる「鎌倉新仏教＝宗教改革」という思想の変遷を実証的に描き出し、単著としてまとめている。具体的な成果としては、国内外での研究報告を計7回行い、学術論文を3本執筆して完成させた（いずれも定評のある国際誌に投稿し、1本は採用済み、残り2本は査読中である）。

今後の展望および課題

上記のように、本研究では1880年代から1940年代に至るまで、日本仏教において「宗教改革」という概念がどのように語られ、思想的に展開してきたかを明らかにすることができた。この成果を踏まえ、現在、*Japanese Buddhism and the Protestant Reformation: The History of a Modern Discourse*（仮題）という英語の単著にまとめる作業を進めている。本著では、すでに示したような比較的長いスパンにわたる思想史的展開を描く予定であるが、執筆にあたり、さらに追究すべき重要な課題が二点存在することを認識している。

まず一つ目は、仏教の枠組みを超えて、いわゆる「文明開化」期におけるルター運動の受容や理解の過程を、より深く検討することである。たとえば、福沢諭吉はその画期的ベストセラー『西洋事情』（1872-1876年刊行）において親鸞とルターの比較を試みており、1874年創刊の『西洋事情』を中心に当時の知識人が展開した「文明」をめぐる議論のなかでも、ヨーロッパの「Reformation」が頻繁に参照されていた。1880年代の仏教者たちが自らの改革論を展開する際、「宗教改革＝文明への道」という思想的前提に立っていたことはすでに確認したが、この理解の成立には明治初期に形成された思想状況が深く関わっていると考えられる。そのため、特に明治初期における日本社会におけるルター像の形成過程を、さらに丹念に追究する必要がある。

二つ目は、1930年代以降の展開に注目し、「鎌倉新仏教」が唯物史観の枠組みで語られるようになり、講座派マルクス主義が戦後の史学界において主流となっていくなかで、その影響が思想史に与えたインパクトを再評価することである。特に永田広志（1904-1947）や、「農民戦争」という観点から日本独自の「宗教改革」の様相を戦中から戦後にかけて論じた稲村隆一（1898-1990）らの思想を精査し、その具体的内実や波及のプロセスをさらに詳しく分析する必要がある。

以上の二点を課題として設定しつつ、本書では日本仏教と「宗教改革」をめぐる思想史の展開を包括的かつ実証的に再構成し、現代の視点から新たな理解を提示することを目指している。

（完）

発表論文および研究報告

- 1) "Luther goes East: Buddhism and the Protestant Reformation in 1880s Japan," *History of Religions* (accepted for publication)
- 2) 「明治仏教界の宗教改革論」武蔵大学東西文化融合史研究会第10回例会、2025年3月14日（於武蔵大学江古田キャンパス）
- 3) 「松本彦次郎と宗教改革としての鎌倉新仏教」日本思想史学会2024年度研究大会、2024年11月10日（於筑波大学筑波キャンパス）
- 4) 「〈宗教改革としての鎌倉新仏教〉言説史への新視点——原勝郎とその後」佛教史学会第74回学術大会、2024年10月27日（於大谷大学慶聞館）
- 5) 「明治十年代における日本仏教と〈宗教改革〉」日本宗教学会第83回学術大会、2024年9月15日（於天理大学柚之内キャンパス）
- 6) 「鎌倉仏教と宗教改革——原勝郎の歴史思想・再考」ワークショップ「近現代日本における改革と革命の宗教思想」、2024年2月2日（東北大学川内キャンパス）
- 7) "In Search of New Buddhism: Reformation Tropes in Late Nineteenth-Century Japan," The Fifth Annual Tohoku Conference on Global Japanese Studies, December 9, 2023 (Tohoku University Kawauchi Campus, Japan)
- 8) 「高橋五郎における仏教と宗教改革」日本思想史学会2023年度大会、2023年11月12日（於東北大学川内キャンパス）